読む医療 専門医が語る現代病気事情

膵臓がん治療は様々な方法で

肝臓には肝細胞と胆管上皮細胞があり、それぞれがん化したものを「肝細胞がん」「胆管がん」と呼び区別しています。ただし、大半が肝細胞がんであることから一般に肝がんというと肝細胞がんを意味します。

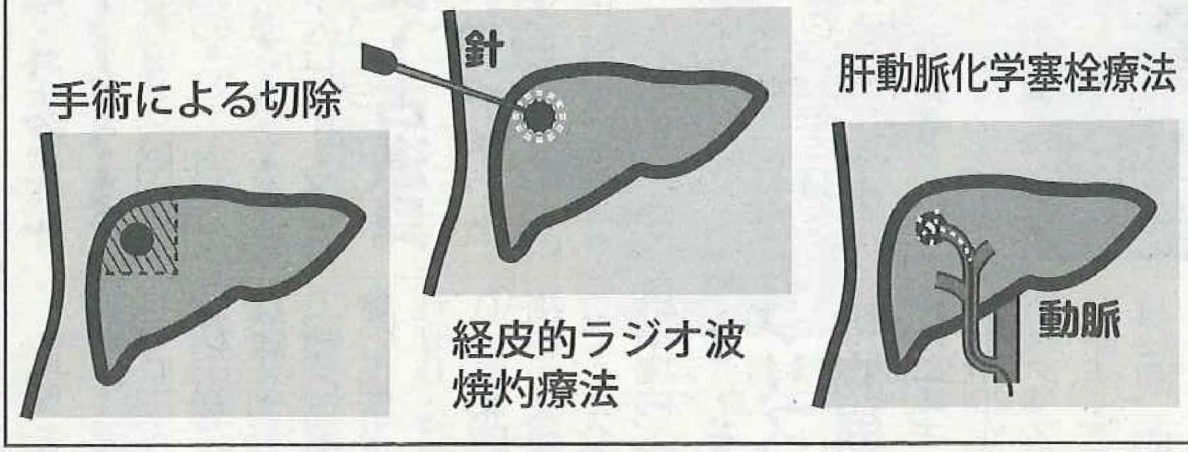
日本人の肝がんの約90%は肝炎ウイルスの感染によって起こります。主に昔の輸血が原因です。その代表格はC型肝炎ウイルスで、感染後に慢性肝炎、肝硬変を経て約30年の経過で肝がんを発生するとされています。一方、B型肝炎では無症候性ウイルスキャリアや慢性肝炎の状態でも肝がんを発症することがあります。他方、最近ではアルコールの飲み過ぎや脂肪肝などから発生する肝がんが着目されています。

肝がんの多くは症状がなく、慢性肝炎や肝硬変の治療中の超音波検査やCTスキャンなどで発見されます。ただし、進行すると上腹部のしこり、痛み、発熱、黄疸などの症状もみられます。慢性肝炎や肝硬変などハイリスクの患者さんには、血液検査のアルファフェトプロテインなどの腫瘍マーカーや腹部超音波検査での定期的なスクリーニングが極めて有効です。

◇執筆者紹介＝宮下正夫／日本医科大学消化器外科教授／日本医科大学千葉北総病院外科部長　医学博士／日本消化器外科学会指導医／日本消化器病学会指導医／日本がん治療認定医機構認定医／日本消化管学会胃腸科指導医／消化器がんの手術が専門。

多くの選択肢から最善の治療法を

●肝がんの様々な治療法



経皮的療法では熱や栄養遮断でがん細胞が壊死

最も確実な治療法は手術です。切除範囲はがんの大きさ、部位、肝臓の予備能力などによって様々です。他には、経皮的治療、肝動脈化学塞栓療法などの治療法があります。

経皮的治療には、近年ではラジオ波焼灼療法が多く用いられます。実際には、超音波やCTで位置を確認しながら針を皮膚から肝がんに穿刺し、熱凝固により壊死に陥らせる方法です。比較的手軽な方法ではありますが、がんの大きさが3cm以内、数が3個以下のものが適応とされます。

肝動脈化学塞栓療法では、カテーテルを用いて、がんを栄養している血管内に抗がん剤を注入し、さらに塞栓剤で遮断することでがん細胞を壊死させます。

このように多くの選択肢がある中で、ベストな治療を受けることが重要です。